

洋学紳士は 「完全民主制による武装放棄や非戦論」を展開

中江(なかえ) 兆民(ちょうみん)



明治時代中期、藩閥政治への不満から民権運動が大きな盛り上がりを見せるなか、その理論的な支柱を作り出そうと奮闘した思想家・中江兆民。代表作『三酔人経綸問答』（さんすいじんけいりんもんどう）は民主主義の本質を問う名著。1887年（明治20年、兆民41歳）に刊行。内村鑑三・石橋湛山らに先駆け、早い段階で小日本主義を主張していると評価される。

ユニークなのはその形式。三人の人物の酒を飲みながらの問答によって進んでいく。3人の思想の異なる登場人物、洋学紳士（紳士君）、東洋豪傑（豪傑君）、南海先生が酒席で議論する物語。紳士君は人類史を3段階に区分し、明治10年代に日本へ紹介されていた社会進化論を用いて、進化を発展の原動力とした。フランス、ドイツなどヨーロッパ列強を批判し、完全民主制による武装放棄や非戦論などの理想論を展開する。これに対して豪傑君が反論し、中国進出を主張。両者の論争を現実主義的立場に立った南海先生が調停する構成である。

学生時代に中江兆民について研究し、演劇を通じて「対話」の持つ力を訴え続ける平田オリザ氏が、『三酔人経綸問答』（さんすいじんけいりんもんどう）の問答に込められた、現実主義的なリベラルの可能性や、分断が進む現代社会における「対話」の意義を解説する。

（NHK「100分de名著」2023年12月11日）

（（日曜に想う）「三酔人経綸問答」が示唆するもの 『朝日新聞』
2025年3月30日）

「三酔人」の最後、酔った南海先生の「奇論」を期待していた二人が、その平凡な答えに落胆すると、先生はこう諫（いさ）める。「いやしくも国家百年の大計を論ずる場合に、奇抜を看板にし、新しさを売り物にして痛快がることなど、どうしてできようか」

その後の日本は、豪傑君の説よろしく日清戦争に突入し、破滅へ進んだ。中江兆民が語らせる南海先生のメッセージは今もって味わい深い。

